

【研究報告】

コロナ禍における実践活動の場以外で行う母性看護学実習の評価と課題 — 臨地実習経験者と未経験者との比較 —

大橋 知子^{1,*} 牛之濱久代^{1,*}

【要旨】

本稿では新型コロナウイルス感染症禍に実施した母性看護学実習の授業過程と学生の主観的実習到達度を明らかにすることにより、実践活動の場以外で行った実習の学修成果を評価し教育への示唆を得ることを目的として実施した。

母性看護学実習修了後の A 大学看護系大学生 4 年生127人を対象として、2021年6月に WEB アンケート調査を行った。授業過程評価については、舟島らによって作成された10の下位尺度で構成される授業過程評価スケール-看護実習用-を用いた。母性看護学実習の達成度については A 大学母性看護学実習評価項目20項目に対し、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法での回答を求めた。本研究への参加の協力が得られた99名（回収率78.0%）を分析対象とした。臨地実習を経験した日数は0日63名（63.6%）、1日7名（7.1%）、2日4名（4.0%）、3日25名（25.3%）。臨地実習を経験した学生の受持ち対象者は妊婦3名（3.0%）、褥婦及び新生児33名（97.0%）であった。臨地実習を経験した日数が0日であった学生を「臨地実習未経験者」、1～3日であった学生を「臨地実習経験者」とし、平均値を比較した。結果、「患者とのコミュニケーションを深めながら実習を展開していた」「患者との関係を築きながら実習を展開していた」から構成される下位尺度Ⅲ【学生-患者関係】に有意差を認めた。母性看護学実習達成度についても同様に、平均値を比較した。結果、全項目において、有意差を認めなかった。実践活動の場以外で行う母性看護学実習では、対象者とコミュニケーションを深めることや関係性を築くことのできる教育方法を検討する必要があること、実践の場以外で行う実習において、母性看護学実習の実習目的、目標は達成することが可能であることが明らかとなった。

キーワード： 母性看護学、実践活動の場以外の実習、学内実習、
新型コロナウイルス

【緒言】

看護系大学の増加や少子化の進展に伴い、母性看護学実習の施設確保は年々困難となっている。2015年厚生労働省¹⁾は母性看護学実習における臨地実習について、病院以外の施設も実習施設に含めることができること、さらに臨地実習を充実させるために実践活動の場以外で行う学習の時間を、臨地実習に含めて差し支えないことを示した。2020年人口動態統計²⁾によると、出生数は2019年から2万4404人減の84万835人となり、今後も看護学生が妊産褥婦・

新生児と接する機会は減少することが予想され、病院以外の施設において教育効果の高い教育手法の開発が必要となっている。

そのような状況に加え、新型コロナウイルス（以下 COVID-19）の影響により臨地実習は学内実習やリモートを利用した遠隔実習への変更を余儀なくされた。各看護師養成校は文部科学省及び厚生労働省の事務連絡（2020年2月28日付）を踏まえ、臨地実習の学びと同様の学びを確保するために工夫を凝らして実習を実施した。

2015年以降、川端ら³⁾の母親アドバイザーを活用

¹九州看護福祉大学看護福祉学部 看護学科

した母性看護学実習プログラム開発や草薙ら⁴⁾の母性看護学実習と小児看護学実習を統合した母性看護学臨地実習の効果についての報告はあるが、紙上事例やモデル人形を用いた実践活動の場以外で行う母性看護学実習（以下学内実習とする）の教育効果については十分検討されていない。学内実習の授業過程と学生の主観的実習到達度における学修成果を評価し、教育への示唆を得ることを目的として調査を実施した。

用語の定義

実践活動の場以外で行う実習

本研究で用いる実践活動の場以外で行う実習とは、大学内で行った実習すなわち学内実習と定義する。

本研究では厚生労働省医政局看護課通達に「実践活動の場以外で行う学内実習」と明記された「学内実習」すなわち大学内で行った実習を指す。

臨地実習経験者

1日でも臨地実習を経験した学生を臨地実習経験者とした。

【研究方法】

1. 研究デザイン

横断的調査

Microsoft Forms を用いた WEB 調査

2. 母性看護学実習の教育概要^{5) 6)}

コロナ禍においても本来の目的・目標は変更せず実習内容を変更することで達成できるよう工夫した。

1) 実習目的

母性看護学で学んだ知識、技術を統合し、周産期における母子とその家族に対し、身体的・心理的・社会的特性を理解し、個別的な看護を実践するための基礎的能力を養う。また、リプロダクティブヘルス／ライツの観点から、周産期における女性及び子ども・パートナーの健康課題と、生涯を通じた健康支援の必要性及び看護について考

察する。

2) 実習目標

(1) 周産期の母子と家族の身体的・心理的・社会的特性を理解し、各期の適応の過程を明らかにすることができる。

① 妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期の生理を述べることができる。

② 対象者の身体的・心理的・社会的特性を記述できる。

(2) 周産期の母子とその家族に対し看護過程を展開できる。

① 系統的に情報収集し、情報を総合的に関連づけてアセスメントすることができる。

② アセスメントに基づき、対象者のケアニーズを明らかにし、看護上の診断を抽出できる。

③ 母子とその家族に対して、根拠に基づいた看護が計画できる。

④ 看護計画に基づき安全・安楽を考慮した個別的なケアを実践し、評価できる。

(3) リプロダクティブヘルス／ライツの観点から、周産期における女性及び子ども・パートナーの健康課題を踏まえ、対象者の生涯を通じた健康教育・ケアのあり方を考察できる。

① 周産期における女性及び子ども・パートナーの健康課題について考えることができる。

② 対象者の健康課題を踏まえた健康教育の意義、方法について考えることができる。

(4) 母子と家族の健康に関わる看護者の役割と責任を自覚した行動をとり、母子保健医療チームメンバーとして連携・協力する方法を考察できる。

① 生命の尊厳や対象者の尊重について認識を深め、倫理的配慮を持った態度と行動がとれる。

② 周産期の母子とその家族を取り巻く社会システム及び地域社会におけるサポート資源について学び、妊娠期からの包括的な継続看護の必要性について考察できる。

表1 母性看護学実習日程表

	月	火	水	木	金
1週目	学内実習	臨地実習	学内実習	臨地実習	臨地実習
2週目	学内実習	学内実習	学内実習	学内実習	学内実習

- ③ 母子保健医療チームメンバーとして適切な人間関係を作り、報告・連絡・相談ができる。
 - ④ グループの中でリーダーシップ、メンバーシップを発揮し、協力することができる。
 - ⑤ 看護学生として基本的な行動がとれる（挨拶、言葉遣い、身だしなみ、時間を守ることなど）。
- (5) 自己の学習過程を振り返り、今後の学習課題を明らかにすることができる。
- ① 自己の行動や気持ちを振り返り、記録やカンファレンスなどで表現できる。
 - ② 今後の学習課題について述べることができる。

3) 実習内容

COVID-19による学内実習移行がスムーズなように1週目は臨地実習、2週目は学内実習とした。母性看護学実習日程表を表1に示す。

(1) 1週目：臨地実習または学内実習

臨地実習の場合、病棟実習とし2名の学生で1組の母子を受け持ち、看護過程を展開する。但し、実習施設により受持ち事例がない場合は、妊婦健康診査を受診する妊婦の同意を得て情報を収集し、看護過程を展開する。臨地実習では、初日に受持ちを決定して情報収集し、翌日に学内で収集した情報の整理と不足情報の確認をする。情報収集やアセスメントは、カルテや受持ちとのかかわりを通して行い、看護問題の抽出、看護計画立案まで実施し、看護の方向性について考察し、実習最終日に指導者から指導・助言をもらう。計画した看護は2週目の学内実習でシミュレーション演習にて実施する。学内実習の場合は、2名ないし3名で1つのペーパー事例の看護過程を展開する。

(2) 2週目：学内実習

1週目に受け持った対象者またはペーパー事例に計画した看護をシミュレーション演習で行う。演習で行う看護技術は、受持ちに実施することを想定し、褥婦の健康観察、新生児の健康観察、沐浴、褥婦に対する保健指導、及び妊婦健康診査である。但し、1週目に臨地実習ができた場合は、対象者に実施した技術項目は演習しないこととした。演習では、新生児以外は教員が妊産婦役となり、学生はロールプレイを行

う。各演習実施後はその場で振り返りをするとともに、学生の自己評価と教員の評価を行い、学生へのフィードバックとした。

3. 対象者

対象は、2020年度母性看護学実習を修了したA大学看護系大学生4年生127人である。

4. データ収集及び期間

研究対象者に、研究の概要、研究協力の自由、匿名性の確保などについて書面を用いて説明した。同意が得られた場合は、説明書に記載されているQRコードを読み取りアンケートに回答することを求めた。説明及びデータ収集は2021年6月の1ヶ月間で行った。

5. 調査内容

1) 対象者の属性及び母性看護学実習の経験内容

対象者の年齢、性別、臨地実習の有無、臨地実習場所、受け持ち対象者の背景、演習実施項目、保健指導の内容

2) 授業過程評価スケール－看護実習用－

舟島ら⁷⁾によって作成された評価スケールである。調査内容は10の下位尺度「オリエンテーション」2項目、「学習内容・方法」6項目、「学生－患者関係」2項目、「教員、看護師－学生相互関係」14項目、「学生への期待要求」2項目、「教員、看護師の指導調整」2項目、「目標・課題設定」3項目、「実習記録の活用」2項目、「カンファレンスと時間調整」3項目、「学生一人的環境」5項目から構成されている。回答は「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法での回答を求め、それぞれ1点から5点とし、合計点が低いほど授業過程評価が低く、合計点が高いほど授業過程評価が高い。本研究は教員の授業過程評価を目的としているため、質問項目から「実習指導者」の文言を削除した。さらに、母性看護学では健康レベルの高い対象者を受け持つため質問項目の「患者」を「対象者」に変更した。

全ての実習が学内実習であった学生には、42項目の内、実習指導者、医療従事者と教員の関係を問う4項目と看護師の対象者への態度から学生の学びを問う1項目計5項目を除いた37項目の回答を求めた。臨地実習を行った学生は、42項目の回答を求めた。尺度使用に関しては、所定の手続きを経て使用及び変更に関する許諾を得た。

3) 母性看護学実習の達成度

A 大学母性看護学実習評価19項目について「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法での回答を求めた。それぞれ1点から5点とし、合計点が高いほど達成度が高く、合計点が低いほど達成度は低い。

4) その他

母性看護学実習に関して困難だと思ったこと、ストレスに感じたこと、教員からの支援で良かったこと、どのような支援があればよいかなどについて、感想、考え、気持ちについて記述での回答を求めた。

6. データ分析

データを分析するには、SPSS ver25.0 for Windows を使用した。属性及び母性看護学実習の経験内容については記述統計を行った。

母性看護学実習における臨地実習経験の有無によって、授業過程評価スケール下位尺度得点、母性看護実習達成度の得点の比較は Mann-Whitney の U 検定を用い、有意水準は5%未満とした。

7. 倫理的配慮

研究対象者に対し、研究の趣旨、匿名性と守秘性の保持、研究参加への自由意思と途中辞退の尊重、成績評価とは無関係であること、研究結果の公表の手段として学会等で発表する可能性があるが、個人は特定されないことについて口頭及び文書にて、教

員が説明し、研究参加協力の同意を得た。また、本研究は九州看護福祉大学倫理審査委員会にて承認(九州看護福祉大学倫理委員会承認番号03-002)を受けた後に実施した。

【結果】

1. 対象者の概要

本研究の対象者126名の研究協力が得られた99人(回収率78.0%)を分析対象とした。質問内容に回答不備や欠損はなかった。

2. 対象者の属性

対象者の年齢平均は21歳。性別は女性86名(86.9%)、男性13名(13.1%)。臨地実習を経験した日数は0日63名(63.6%)、1日7名(7.1%)、2日4名(4.0%)、3日25名(25.3%)。臨地実習を経験した学生の受け持ち対象者は妊婦3名(3.0%)、褥婦及び新生児33名(97.0%)であった。臨地実習を経験していない学生の受け持ち事例は経産婦11名(11.1%)、初産婦19名(19.2%)、双胎初産婦16名(16.2%)、若年初産婦7名(7.1%)、誘導分娩で出産した初産婦11名(11.1%)、未回答2名であった。

3. 授業過程評価スケール—看護実習用—

臨地実習を経験した日数が0日であった63名を臨地実習未経験者とした。臨地実習を経験した日数が1日～3日であった36名を臨地実習経験者とした。

表2 臨地実習経験別授業過程評価の比較

項目	n=99					
	臨地実習未経験 (N=63)		臨地実習経験者 (N=36)		p 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
①オリエンテーション	4.04	± 0.79	4.05	± 0.73	0.985	
②学習内容・方法	3.77	± 0.66	3.62	± 0.91	0.542	
③学生—患者関係	3.07	± 0.93	3.60	± 1.00	0.014 *	
④教員、看護師、学生相互行為	3.83	± 0.89	4.13	± 0.78	0.99	
⑤学生への期待	3.60	± 0.94	3.93	± 0.83	0.081	
⑦目標・課題設定	3.67	± 0.74	3.91	± 0.75	0.124	
⑧実習記録の活用	3.90	± 0.80	4.19	± 0.84	0.073	
⑨カンファレンスと時間調整	4.00	± 0.70	4.06	± 0.74	0.629	
⑥教員看護師指導調整			3.99	± 0.74		
⑩学生人的環境			4.19	± 0.72		

Mann-WhitneyのU検定

*p<0.05

1-3日でクラスカル・ウォリスの検定を行ったところ全項目有意差はなかった。1-3日を臨地実習経験者とし、0日を未経験者として分析した。

臨地実習未経験者と臨地実習経験者別に下位尺度の平均値を比較した。結果の詳細を表2に示す。

分析の結果、「患者とのコミュニケーションを深めながら実習を展開していた」「患者との関係を築きながら実習を展開していた」から構成される下位尺度Ⅲ【学生-患者関係】に有意差を認めた。

4. 母性看護学実習の達成度

授業過程評価スケール-看護実習用-と同様に、臨地実習未経験者と臨地実習経験者別に平均値を比較した。結果の詳細を表3に示す。分析の結果、有意差を認めなかった。

IV. 考察

今回の調査より、看護学生の母性看護学実習における臨地実習を行った学生と学内実習を行った学生

の授業評価と実習の達成度が明らかとなった。調査結果に基づき、学内で行う母性看護学実習における教育上の課題について考察する。

1. 母性看護学実習における授業過程評価

授業過程評価を分析した結果、臨地実習を経験した学生と比較して、臨地実習を経験しなかった学生は対象者とコミュニケーションを深めることや関係性を築くことが難しいことが明らかとなった。

学内実習では、教員が妊産褥婦役となり「褥婦の健康観察」「妊婦健康診査」「保健指導」を行った。佐藤ら⁹⁾は、看護師や看護大学院生、教員がSP役に扮するのではなく一般市民がSPを務めることは、より臨床場面の患者を想起させるものであり、具体的な患者像を形成するのに効果的であると述べている。

本実習では、演習ごとに患者理解につながることをねらいとして、教員がコミュニケーションで気になった点や続けていくと良い点などをコメントして

表3 臨地実習経験別実習達成度の比較

項目	n = 99				p 値
	臨地実習未経験者 (N=63)		臨地実習経験者 (N=36)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期の生理を述べる事ができた	3.57	± 0.712	3.56	± 0.809	0.921
対象者の身体的・心理的・社会的特性を記述できた	3.75	± 0.803	3.58	± 0.841	0.432
対象の情報を系統的に収集し、統合的に関連付けてアセスメントできた	3.56	± 0.778	3.78	± 1.017	0.152
アセスメントに基づき、対象者のケアニーズを明らかにできた	3.70	± 0.710	3.81	± 0.951	0.263
母子とその家族に対して、根拠に基づいた看護が計画できた	3.60	± 0.794	3.67	± 0.926	0.499
対象者の状況を踏まえた看護計画を立案できた	3.63	± 0.885	3.64	± 0.899	0.87
看護計画に基づき、安全安楽に配慮したケアを実施、評価できた	3.68	± 0.858	3.67	± 0.862	0.991
周産期における母子とその家族の健康課題について考える事ができた	3.81	± 0.737	3.58	± 0.841	0.285
対象者の健康課題を踏まえた健康教育の意義について考える事ができた	3.76	± 0.797	3.53	± 0.696	0.115
生命の尊厳や対象者の尊重について認識を深め、倫理的配慮を持った態度と行動がとれた	3.84	± 0.745	3.97	± 0.910	0.441
母子保健医療チームメンバーとして適切な人間関係を作り、報告・連絡・相談ができた	3.79	± 0.919	3.69	± 0.951	0.633
グループの中でリーダーシップ、メンバーシップを発揮し、協力する事ができた	3.94	± 0.896	3.75	± 1.025	0.426
看護学生として基本的な行動がとれた(挨拶、言葉遣い、身だしなみ、時間を守ることなど)	4.57	± 0.615	4.25	± 0.906	0.109
自己の行動や気持ちを振り返り、記録やカンファレンスなどで表現できた	4.08	± 0.789	3.92	± 0.841	0.312
今後の学習課題について述べる事ができた	4.03	± 0.861	3.94	± 0.674	0.599
カンファレンスの運営に積極的に関わることができた	3.73	± 0.937	3.86	± 0.833	0.628
実習に必要な知識を予習できた	3.62	± 0.851	3.58	± 1.052	0.862
積極的・自主的に実習に参加できた	4.05	± 0.851	3.86	± 0.961	0.359
指定された提出物を期限内に提出できた	4.40	± 0.773	4.42	± 0.806	0.796

Mann-WhitneyのU検定

*p<0.05

いた。また、教員同士で話し合いや方法を検討して模擬患者役を行った。しかし、教員が模擬患者を行うことには限界があることが示唆された。学生にとって教員は評価者であり、妊産褥婦として教員を捉え、人間関係を構築することには限界があると考えた。

文部科学省及び厚生労働省⁸⁾は臨地実習を演習に代替する場合の留意点として「患者とのコミュニケーション能力を養う演習等可能な限り臨地に近い状況を設定し、演習を行うこと」としている。コロナ禍でWeb会議システムを利用した保健指導¹⁰⁾¹¹⁾や劇団員模擬患者を活用した事例¹²⁾が報告されている。今後学内実習を行う際には、臨地実習を1日以上経験した学生と全く経験していなかった学生に有意差が見られたことから学生が少なくとも1日以上母親や父親とコミュニケーションを図ることができる機会を持てるように教育方法を検討する必要がある。具体的な方法としては模擬患者もしくは両親に対して、実習協力を依頼することやWEBシステムの導入などである。

2. 母性看護学実習の主観的達成度

母性看護学実習の達成度においては、臨地実習を経験した学生と臨地実習を経験しなかった学生に主観的な達成度に差はなかった。

今後も人口動態の変化やコロナ禍の影響による出生数の減少、総合病院における産科病棟の閉鎖により、母性看護学実習の実習施設確保は困難となることが予測される。

本研究において、実践活動の場に代わる実習として、学内実習を行った。学内実習では、ペーパー事例を用いた看護過程の展開や教員が母親役となり援助技術を実践した。臨地実習では、看護計画立案前に見学や実践を行うこともある。褥婦及び新生児は入院期間が短く、また日々急速にかつ劇的に変化していく。学生は日々情報収集を行い、アセスメント、計画立案、実践を行うが、対象者の急速かつ劇的な状況を適時に分析するには限界があった。一方、学内実習の場合は計画を立案した上で実施することが可能であった。学生は演習時には個別的な問診や観察項目を立案した上で、演習に臨むことができた。その結果、立案した看護計画と実施との整合性が確保されていたと考える。

看護過程においては、ペーパー事例を展開するこ

とで、情報収集を行い、アセスメント、計画立案、実践と一連の流れが順序を踏んで実践できた。このことから、母性看護学実習の主観的達成度が確保できたと考える。

学内実習で学生は、自分が対象者に行うケアを映像に撮り、繰り返し視聴した。実習後に教員は対象者としての視点と教員としての視点双方から学生にフィードバックを行った。学生はフィードバックを踏まえて、ケアの改善を図り実践につなげた。川瀬¹⁴⁾らは模擬患者を看護技術演習に取り入れることは、一連の思考過程や患者への配慮、自己の振り返りにつながると述べている。臨地実習では学生が行うケアに対し、言語的フィードバックを対象者と実習指導者双方からもらうことは難しい。援助技術に関して差が見られなかったのは、繰り返し実践、振り返りできことで、母性看護学実習の主観的達成度が確保できたと考える。

V. おわりに

1. 本研究の限界と今後の課題

本研究は対象校が1校であるため、授業過程評価や母性看護学実習達成度に対象校のカリキュラムや教育内容が反映されている。今後は対象校を増やすことで実践活動の場以外で行う母性看護学実習の教育効果を検討する必要がある。

また、本研究では臨地実習経験者と未経験者で分析を行った。今後は臨地実習で経験した技術等学修に関連する要因を明らかにし、実践活動の場以外でも教育効果を得られる教育方法を検討する必要がある。

2. 結論

- 1) 臨地実習経験の有無は、臨地実習が1日であっても「患者—学生関係」に有意差があった。
- 2) 母性看護学実習の達成度においては、臨地実習の有無での有意差はなかった。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

【謝辞】

研究にご協力いただきました看護学生の皆様に心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 厚生労働省；平成27年9月1日付け事務連絡「母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について」
- 2) 厚生労働省（2022）. 令和2年（2020）人口動態統計（確定数）の概況2022. 厚生労働省ホームページ.
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei20/dl/02_kek.pdf（2022年6月1日閲覧）
- 3) 川端愛子ら. 母親アドバイザーを活用した母性看護学実習プログラム開発. コミュニケーション障害研究. 2016; (16):33-44.
- 4) 草薙美穂ら. 母子看護学臨地実習における段階的実習と選択的実習の効果. 天使大学紀要. 2016;16(2):5-15.
- 5) 牛之濱久代, 大橋知子, 森口範子. 新型コロナウイルス感染症禍における母性看護学実習の工夫と課題（第1報）実習の概要と看護過程展開の実践報告. 九州看護福祉大学紀要. 2022;22(1):105-110.
- 6) 牛之濱久代, 大橋知子, 森口範子. 新型コロナウイルス感染症禍における母性看護学実習の工夫と課題（第2報）シミュレーション演習の実践報告. 九州看護福祉大学紀要. 2022;22(1):111-119.
- 7) 舟島なおみ, 杉森みどり. 看護学教育評価論. 文光社;2000. p.46.
- 8) 文部科学省, 厚生労働省;新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師養成所等における臨地実習の取り扱い等について. [令和2年6月23日付 事務連絡]
https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou_01-000004520_1.pdf (2021年5月31日閲覧)
- 9) 佐藤公美子ら. 「看護過程論」における模擬患者参加型授業の学習. 札幌市立大学研究論文集. 2009;3(1):69-74.
- 10) 細川陸也ら. 京都大学における COVID-19流行下の保健師家庭教育実習①. 保健師ジャーナル. 2020;(76)10:848-852.
- 11) 塩見美抄ら. 京都大学における COVID-19流行下の保健師家庭教育実習②. 保健師ジャーナル. 2020;(76)10:922-925.
- 12) 相撲佐希子ら. 劇団員模擬患者を活用したリアリティある実習への挑戦. 看護教育. 2021;62(1):56-61.
- 13) 漆野裕子. 母性看護学における倫理教育に関する文献検討. 聖泉看護研究. 2019;8:45-52.
- 14) 川瀬淑子ら. 模擬患者（SP）参加型看護技術演習の教育的有用性の検討. 日本看護学教育学会誌. 2014;24(2):39-48.